

2024年5月

課題本 『老いを愛づる』

中村桂子/著

中央公論新社

2022年

◆◆◆5月の読書会から

先月の感想文を読んで振り返ることから始まりました。久しぶりに出席した参加者が実際に推し活をしており、その人の話を聞いて課題本への理解が深まるとともに、そこから再度「推し」とは？「推し活」とは？ということで盛り上がりました。

今月の課題本は『老いを愛づる』。著者は80代の科学者中村桂子さんです。老いの捉え方、暮らし方に始まり環境、戦争、競争社会などを取り上げ生きるとは、生きものとは——と著者が研究している世界も触れることができる一冊です。

(文責:森下)

2024年5月 竹原読書会『老いを愛づる 生命誌からのメッセージ』

吉川五百枝

“子どもは、昨日できなかったことが今日ではでき、

老人は、昨日できたことが今日ではできない“ ……その通りです。

先月お目にかかった著者の中村桂子さんは、今年 88 歳になられました。こちらでの講演会の日、広島空港に飛行機の到着が少し遅れ、ヒヤヒヤした出迎え陣の気持を慮られたのでしょうか、小走りに出口に向かってこられたそうです。

昨日走れて、今日も走れる。幼老の差無し、というみかけの元気さもお持ちの中村さんでした。

2 年前、86 歳というその年齢で「老」を語られた中村さんは、一般的な区分から言えば老人の部類でしょう。その“老人”の中村さんが「老」を語られる。

この『老いを愛づる』の題から感じられる科学者らしい視点、出来ただとか出来ないとかの視点から少し離れ、「老」を客観的に見ておられる姿勢を感じます。お気に入りの「虫愛づる姫君」よろしく、扇の上に「虫」ならぬ「老」を乗せ、本地(仏教用語で 本質の意味)をたづぬる愛おしそうな姫君の眼差しになっておられる。

いのちの流れがもたらす「老」の運んできたもの。そして得られたもの。

それらをこんな風を書いていかれました。

「何のために生きるのか」「学問したら何の役にたつんだろう。」この問いを“たづね”られます。

「学問すれば考える力が付く。考える力が付くと世の中どう変わっても何とかして生きていける」(たそがれ清兵衛)

「ああ生まれてきてよかったなって思う事がなんべんかあるんじゃない、ね。そのために人間

生きてんのじゃねえのか。お前にもそういうときが来るよ、うん。まあ、がんばれ」(寅さん)

両方とも、原作にはない山田洋次監督の美事な言葉として、中村さんは捉えておられます。自分で考えて、本当に大事なことを見つけながら生きている普通の人を描いているところに共感しておられるのです。

太宰治の引用〈覚えると言うことが大事なのではなくて、大事なのはカルチベートされるということなんだ。カルチュアというのは心を広く持つということ。つまり愛するということを知ることなんだ。直接役立てようと焦ってはいかん。〉『パンドラの篋』も同じように、学問の意義についての解釈です。ここからも、カルチベート(=耕す 栽培する)という言葉を立てておられます。

〈人間も耕して教養を身につけるようにすると言う意味に転じていったのでしょうか〉と語りながら、耕す事が人間らしい生活の始まりであり、耕す事は 自然を生かす行為なのだと、生命誌研究の立場から語られます。

わからないことを一番たくさん持っているのが科学者だと言われますが、これからの社会ではこのように、覚えることより、考えながら生きていく事が大事になるのではないかと次の世代へ文字として示されているのです。

カルチュアが耕すことも意味するということを知っていたわけではないのですが、「耕す」という言い方を私も好みとしています。

最近では、中村桂子さんとの集いについて、事前合同読書会のお誘いの文章で使って居ます。「お話を聞く前に、聞く耳(心)を耕しましょう」という思いで書きました。「耕す」というのは主体的で良い響きだと常々思っているからです。

これからの科学は、日常と思想とを含む知となることを示唆されていて、大切なことだと私も思います。仏教思想も、一度自然を客体化しながらそれを主体と合一化していく知があると感じています。葉っぱの上に玉を結ぶ1粒の露にも、宇宙を見る事のできる思想です。

カルチベートされた人間とは、どういう人かと問われたら、著者は、〈想像力を豊かにして新しい文明を想像する人〉と答えるそうです。学校で勉強するのは、一人一人が自分の暮らし方をよく考えること、と言って。「戦争は本当にバカバカしい事だ。決してやってはいけないとわかるはずだ」というのが、著者の「よく考えるという中身」なのだと思います。

「老」は、〈知識ではなく知恵が体のあちこちに存在するようになるという感覚です。〉そう言われると、そうなのですが……。

そうなのですが、私はここで大きな問題にぶつかります。

〈「私たち生きものの中の私」として生きる〉これは、中村さんが掲げられるテーマなのですが、生きものとしての「私たち」と、その中を生きる「私」とでは違ってくるという矛盾です。「戦争はバカバカしいしことだ。やってはいけない」と 殆どの「私たち」は考えるだろうと思います。けれども「私」という視点に移すと、全ての「私」がそう思っているのでしょうか。「私たち」と「私」との大きな乖離。

人間世界では戦争が終わらないのです。

戦争はいけないと「私たち」としては思うけれど、その一人であるはずの「私」は、至る所で戦争をする“正義”を支える。武器を作る法律も、解釈を変える政府も、無言でなすがままにして支える。

この大きな乖離の解決策は何なのでしょう。

とりあえず思うのは、「私」が学んで考えるということ。そのことを、他の「私」と対話すること。読書も「対話」の1つです。本に登場するのは、自分ではない「私」です。だから、他者にであうことを意味します。

しかし、読むだけでは「自分」から離れられない。自分の経験や、想像や、自分の知識だけでしか読めないからです。

読書を一次対話とすれば、その本とであった“自分”を突き放して、別の他者に出会わせることを、二次対話といえましょうか。他者の読みは「自分」のように思っておりになりません。カントの『永遠平和のために』にであった人達が、「あの本がね」とお互いに話して居られる場面を何度も見ました。

そして、とりあえずのもう一つは、今の自分と同時代を生きる人の生き方を学ぶこと。真似ぶこと。中村さんは、中村 哲さんやムヒカさんについて書かれます。消費社会でコントロールされている自分に気が付くこと、つまり、欲望の論理のまっただ中にいて、「自己中」が生きる根本になっている姿。それを思うと、82歳半ばを過ぎた今、自分については「これでいいのだ」とは言いづらい。「これしかなくて生きて来た」と本を閉じました。次世代に思いをかけることなど恥ずかしくて言えない私です。

『老いを愛づる』を読んで

◆ 【 YA 】

著者の略歴を見て、若いときに生命科学と言う遺伝子やDNAの生命体をしるための研究を志し現在80歳後半にしてなお研究を続けられている姿に驚いています。

著者の体験や経験の年月に培われての人生に裏打ちされている本は、易しく読みやすかった。

生命の兆しは、凡そ38億年前、海底奥深くに存在が確認され、そこから色々な生き物が進化しながら、今に連綿と続いている自体に圧倒される。

この話を最近講演で聴いたときは、想像も付かない年数の流れにボーとした。

題名の[老いを愛づる]までには愛づれないが、歳を重ねて良いことは、自由と気持ちのゆとりが有るのではと思う。生活からの規制が無いことは嬉しい。

歳を重ねると、自然に、小さいものや弱いものに、愛しさがわいてくるのだと思う。色々な人の言葉やエピソードがあったが、何れも頷けるものばかり。2019年12月の中村哲さんの殺害のニュースにはガックリした。何故何故こんなことにと悲しかった。

以前老いは人間だけに在り、基本的に野生植物には無いと聞いた。検索してみた。

東大の生命科学研究所の教授の説だった。

野生動物には老いることにメリットが無い、弱れば大きい動物に食べられ、集団に付いて行くことが出来なくなれば、そこで死を迎え、正に弱肉強食の世界、そして動物の数も巧く均衡がとれる。

人間の老いのメリットが3つ述べて有る。

一つが老いた人が居る方が進化に有利。

二つ目が生物学的な価値や役割は、経験や知識の継承、次世代の育成

三つ目が、いざこざが起こらないような社会の安定とある。

成る程と思うが難しい ことだろうと思う。体力の衰えは仕方のないこと、取り敢えず自由を楽しみ日々の喜びを見出だし、とにかく出来るだけ自然体で生活出来れば万々歳と思えればと。

◆ 【 KT 】

中村桂子さんは生物学者？生物学者としてエッセイを書いています。きっと日々思うことを後世に伝えておきたくて大切なことを書いたのだと思います

生活や仕事をしていくと～あるはずなのにどうしてうまくいかないのだろうと思うことばかりです。

最近機械を扱う仕事を習いましたがマニュアル通りにするために覚えることはたくさんありますが、それでも同じ材料を扱っても日々調子が違うのです。それで悩んでしまってとうとうやめてしまいました。それに時間内に効率よくしないといけないので速くしないといけないのです。

世の中は便利であっても思うように、無駄もなく片付けることは難しいとつくづく思います。

機械だけでなく生物、人間ならなおさらです。マニュアル通りに生きていけないのがほとんどです。子育て、結婚、人間関係、社会の団体においてもです。

きりが無い。

これで良いのだ！

と思うわりきりが必要なのです。最善を尽くしたら後は神様にゆだねて祈りましょう。

と思うように考えることにわたしはしています。

桂子さんはバカボンの言葉にヒントを得ていました。

寅さんのことばも出てきました。

～でなければならぬがなぜなのか？と思うことばかりです。コンピューターを扱う人は自死をしやすいつきいたこともあります。

自分も世の中のことも動かさない人間はほとんどです。

この桂子さんの本を読んで少し気が楽になりました。

自然と共存してうまくいきることが大切だともありました。

包丁を作っても何に使うかで結果は違います。それと同じように便利なものを発明しても人間としてよく考えて愛を動機としていかなければ良いものはうみだせないのです。特に武器とか戦争に使ってしまうのはおのずと良いか悪いかわかるはずです。

人間は考える知恵や力が特に他の生物と違ってありますのでそうしたいものです。

中村桂子さんは後世に幸せを伝えたくて思いを書かれたと思いました。

◆【 KH 】

さて、『推し 中村桂子さん』を公言した身としては、どこから書いたものか。実は、ここ数ヶ月私の部屋には、中村桂子さんの著書が14、5冊 おまけに福岡伸一さんやら、さらに柳澤桂子さんの著書まで積まれていて、完全に消化不良状態。理科(じゃない科学オンチな私が、細胞とかゲノムとかのワードに素早く反応して、孫相手にあのね命は全て1つの細胞から始まっていてね。。。と講釈をはじめれば一ちゃんとなっている。そういえば、E テレでは『働く細胞』というアニメ番組が4月から始まっている。孫がテレビを見ていて偶然に知っただけけれど。そこで気になったこと、働く細胞 その通りと思って見ていたら、白血球が体外から侵入して来た細菌と戦う、まさに戦闘シーンのような表現に随分違和感を持った。違うよなあタイトル通り細胞は働くのであって、決して戦闘、戦っているのではないんじゃないか。アニメでは、体内で武器を持った白血球が、細菌相手にバシッ、ズバッと戦いを繰り広げている。これ、ちょっと違う。と言うのはやはり一ちゃんの感想か。

正直に言って、悲しいかな生命誌へのアプローチは、自分の中ではそれなりに、納得、腑に落ちたような、わかっていないようなで、全く要領をえないわけだ。38億年の歴史から見たら、三葉虫(太古の生き物という認識だったのに)が登場したのも、生命誌館の階段の終点の4段前でしかない。生き物が出現したのは、ついこの前！ということは納得できた。そこから、大変な気候の変動をへて、奇跡的に生き残った生き物の子孫の子孫として、せめて地球という美しい星(これも大風呂敷なので、竹原、本川辺り)を身の丈レベルで守るために生ゴミ減量、せっせと野菜クズは切り刻み、乾燥させ、堆肥作りに精を出している。「野菜は、皮や芯まで有機物。ゴミにせず、土に戻すのが本筋」とおっしゃる、『推し 中村さん』これは解る、すぐ出来る事。

集合住宅に住んでいると、シンクを流れ出た後の排水(油を含む)がどこをどう流れて、川へ、海へ、巡り巡って雨になり、また、生活用水として戻ってくるという循環に想いを馳せる想像力を発揮するのは難しかった。理屈で理解はしていても。完全下水道完備ではない古い家に越したおかげで、家から出た水は、そこに含まれる油、洗剤、その他諸々をはらみつつ、まず、庭の開所へ集まり、排水路を経て川へ、そして海に注ぐことが一目瞭然。いやでも気をつけるようになった。本当に遅ればせながらで恥ずかしい。結局、自分のやっていることを、原因—結果として目の当たりにしないことには、何もわかっちゃいないということに気付いた。

土や、水、虫、草(植物)から距離のある環境で暮らす孫たちにせめて、うちに来た時だけは自然の中で土もぐれになって遊んでもらいたい。その代わりにムカデもおるし、蚊もおるし、蜂もおる。それでも、子どもらの表情、声は明らかに解放されているなあ、嬉しいなあ。くらのささやかなことしかできない自分。小さい人に必要なのは、自然の中で遊ぶこと。とつくづく思う。

生命誌の美しいブルーの扇について。生き物が、枝分かれするように分岐して進化して来たのならば、樹形図となったはずだが、もっと面(べたつとしたイメージ)で進化して来たということを、中村桂子さんは扇の形で表現されたのだろうという吉川先生のお話は、そうだなととても納得できた。実は、猿と人はどこでどうやって分かれたのかなあと、漠然と考えていた時があったが、結局納得する答えは見つけられなかったのを思い出した。私はここから人の道を行くね。あなたは猿ね。という分かれ方ではないのだろう。偶然や、環境の変化や、想像

も付かないけれど様々な要因が絡んで、今に至るということだから。さらに人の性別も XX と XY で男女が決定すると教科書では学んだが、実は大まかに分けても 8 から 9 通りくらいの男女バージョンがあるらしいと、何かの本で読んだことをおもいだした。科学的にいろいろなことが解明され、説明され、それを学ぶことで、やはり、この地球で生きる生き物は皆仲間。という結論は自然にそうよねえと納得できる。科学的というと、きっぱりスッキリ右と左が線引きされる気がしていたが、この地球にはそうそうスッキリきっぱりいかない生き物が蠢いている。私もその一員。のほほんと日々を送っているが、実はやじろべえ、いやもっと危うい細いピンの上で地球は乗っかってバランスを取っている(環境的にも、平和的にも、それどころか自分の体内での細胞の働きこそが)のかもしれないと思う。何をしたらいいの？私にできることは？

拳を振り上げて、環境を守ろう、戦争も反対という運動は、勇気がなくてできない。平和のため、環境のために戦うのではなく、足元を見つめ考える。実行する。綺麗事かもしれないが、周りの人と心を開きあって対話し、共感し合うことはできるかな。まずは、ゴミを減らす、水を汚さない努力をする。質素な暮らしを旨とする。そして、もう一つ。私の“推し”の中村桂子先生によるとね、“脱炭素”はおかしいんだって、人間も骨や筋肉、脂肪など大切な部分はほぼ炭素でできている。だから“脱 Co2”を目指そうと、子ども、孫に、そしてできたら知り合いに吹聴しようと思う。と、ロイヤルブルーの上着を爽やかに着こなす微笑む桂子先生の写真に向かって語りかけている。

そして、曼荼羅。扇から曼荼羅へ。曼荼羅がよくわからないと言うと、すぐに教えてくださる吉川先生。こんなありがたい読書会はないぞと、いつも感謝しいしい帰途につく。けれど、そういうことかと聞いた耳はおぼつかなく、理解じゃない認識は進んだ。。かな？のレベル。鶴見和子さんと中村桂子さんの対談を読んで所々、成る程ね！と思うのだけれど、時がたつと臆なり。でも繰り返し読めるのが本の良いところだと改めて思う。

『鶴見和子・対話まんだら 中村桂子の巻』藤原書店 2002/7/1

市立竹原書院図書館 蔵書あり

◆【 K子 】

筆者の中村桂子さんは、学者です。学者の本はさぞ難しいのではと構えていましたが………本のカバーの裏に星印があり、6 つのキャッチフレーズがありました。どれも共感するものばかり、ラッキー。

読み進めていくうちに、文章がとても理解しやすいのです。小説家のものには文章表現がとても巧み・難語句に突き当たりと………異なる文章に出会うのも楽しいものでした。中村さんも 80 代。この年代で辿り着いた、これでいいのだ、自然体で人生を味わい尽くす暮らし方。私もまさに 20 歳を 4 回迎えました。なかなかそうはいかなくて………学ぶことばかりでした。知識的なことは増えないが、知恵は増える。これは少し理解できます。すべてが命、愛しい=愛づる、到達したいものです。

星印のキャッチフレーズ

・「老いること」にもいとしさがある(まだ到達していません)

- ・「白髪を染める」ことをやめてみた(実行しようと思っています)
- ・「生きもの」らしく、自然体で暮らす(出来ていません)
- ・孫世代の大谷翔平君・藤井聡太君にときめく(ときめいています)
- ・中島みゆきさんからフーテンの寅さんまで(歌詞・台詞、大好きです)
- ・「老い方上手」な先達から学ぶ(志村ふくみさん、私も大好きです)

◆【 望月悦子 】

今回の課題本「老いを愛づる」を私なりの「老いを愛づる」について考えたことをまとめてみることにした。

生命誌によれば、「地球上のすべての生きものは、38億年前に存在した一つの祖先細胞から生まれた仲間。目に見えないバクテリアなども含め、それぞれの特徴を生かして生きる異なる生きものだが、全てに生きものに共通することは細胞でできている。しかもその中には必ずDNAという物質が入っていて、それが遺伝子の役割をしている」とのことである。今まで、日常生活では「DNA」とか「遺伝子」という言葉は知っていたけれど論理的には考えたこともなかった。金子みすずの詩に「みんな違ってみんないい・・・」ではなくて、もともと人間は祖先は同じだが一人一人違って誕生しているとのこと。「右へ倣え」と一律に行動できないように誕生しているのに、教育で「みんな一緒に」「効率よく」「競争無くして進化無」などと強制されて、機械の部品の如くに人間形成を完成させようとしているのではないか。自分で考える・工夫する・想像することの重要性を教育界では十分理解しているはずなのにその効果は薄い。地域によっては、特徴を生かしながらいろいろ工夫して改革している現場もあるが、それぞれの地域に根差した文化を取り入れて、実践している教育内容をニュースで珍しいことのように取り上げられているようでは、先が思いやられる。

先日、ある若い母親から2歳のわが子が「保育園に行きたくない」と毎日出かける前にぐずると嘆き相談された。「他の子は楽しそうに親と離れているのに」と自分の子育てが間違っていたのではないかと不安に思っていた。十分な愛情の下で育てられた子どもほど、未知な世界に違和感や恐れを感じ親とは離れにくのは当たり前であること。親から離れにくい子どもほど感性豊かに育てられたということが評価されること。親にそれらのことを話すと、安心して見守っていけるようになった。そのうちに徐々に慣れて、自分の居場所を見つけみんなと一緒に楽しんで園生活を過ごせるようになっていった。○か×かではなくて、誕生して2年しか生活していない子どもが、成長するのに時間がかかるのは当たり前のことなのに、それが認められないでいる。愛情たっぷりに育てられる育児が間違っているように思われる状況の恐さを感じた。わたしにとってこういう相談に対応することは、著者の言う若い者を育てることになるのだろうか。

また、引用されている太宰治の小説「正義と微笑」の黒田先生の言葉に、この歳になって改めて共感させられた。「勉強というものはいいものだ。日常生活に直接役に立たないような勉強こそ、将来君たちの人格を完成させるのだ。全部忘れてしまっても、その勉強の訓練の底に一つかみの砂金が残っているものだ。これが貴いのだ。真にカルチベート(品性や才能

を高める。磨く)された人間になれ」と。太宰治がこんな言葉を言うのかと思いながら考えさせられた。「忘れたっていい」「一つかみの砂金が残る」の言葉に励まされてカルチベートされた老いを愛でていこうと思った。そのうえ老いを愛でるヒントまでいただいた。

① 中島みゆき作詞・作曲「時代」どんな「時代」に生きても「そんな時代があった」と思える「だから今日はくよくよしないで、今日の風に吹かれましょう」

② バカボンのパパを見習って「これでいいのだから」

③ フーテンの寅さん「キリがありませんから」

これらのヒントから、無理をしないで、些細なことでも喜びを見出し楽しく充実した老いの日々を過ごしていきたいと思った。

先ずはできることから始めていこう。生ごみや除草した草などで我が家のプランターでの野菜づくりや狭い庭での花づくりの土壌づくりから。

◆ 【 MM 】

今月の課題本は予想外に読み易かった。書かれていることがそのまま理解できる。共感もできる。素直に読めるのだが、するすると読めると心に引っかかるところがないまま終わってしまう。どこか引っかかるところはないかと斜めから見るとつもりで再読したがこれまた素直に読んでしまった。

全体を読んで感じたことは、循環しているということだ。すべてが循環しておりつながっている。過去現在未来、時の流れもつながっているし私たち生きものも自然とつながっている。自分から見える世界だけでなく違う場所からの視点を持つことの大切さを課題本で再確認した。

科学者である著者の目から見た戦争についての記述が新鮮だった。「環境破壊につながる戦争をしている暇はない」。炭素の循環のバランスが崩れ、人間が作り出す過多の二酸化炭素が環境を破壊している。それに加えて二酸化炭素を大量に出す戦争なんてものもってのほか。戦争ではなく平和、競争ではなく共生。

戦争も環境問題も大きな問題だが私達にもできることがあるはず。戦争の悲惨さを伝えることは難しい、とあきらめない。私は戦争を経験していないがそのさなかに生きた人の話は聞いている。その話を伝えていくことはできるのでないか。本や展示で戦争を知ることもできる。忘れたり知ろうとしないことが良くないと思う。竹原読書会では戦争に関係する課題本を選択し考える月もある。ドキュメンタリーや戦争中の物語など。毎年必ずというわけではないがだいたい1年のうち1回は戦争について考える月がある。戦争と向き合うこと、戦争に関する本を読む事、参加者といろんな意見を交わすこと。異なる世代の参加者の考えを聞くことは私にとっては大切な機会だ。

環境のことにしてもできることはあるだろう。この春から子どもが一人暮らしを始め夫婦二人の暮らしになった。まず気づいたのがとにかく消費が減る。電気や水道、ガソリン。中年二人の食事の量も少ない。ゴミも半分に減った。今まで食品の廃棄が多かったことに気づいた。足りないことがないようにと買いすぎでいた。人数が多くても適量を作れる人もいるだろうが私は人数以上の消費に傾いていた。これからはさらに減らすこともできると思う。ゲーム感覚

で楽しみながら取り組みたい。削ることばかりに気を取られず必要なものは摂りながら。t

著者が言いたいことをもう少し知りたくて、読書会のときに図書館の方が参考資料で用意してくださっていた『科学はこのままでいいのかな』(中村桂子／著 筑摩書房 2022年)を借りて読んだ。中高生の生徒に語りかけるように書かれたこの本でも世界は循環していること、便利な世の中は本当にいいものだろうか…?など身近なことからDNAやゲノムなどについて表やイラストも入れながら読み易い言葉で説明してくれる。コロナや戦争についても触れていた。未来を考えたら遠いことや大きいことに感じるかもしれないが、どう生きるかは今、今日どうするか積み重ねなのだなあと思った。人間も自然の一部と考えたら、大それたこと(便利さや豊かさを過度に追求すること)は必要ないと思う。